



『教養』を教える？

現在私は順天堂大学医学部で一般教育研究室に所属し、機能性材料分野（主にバイオ分析）で研究をしつつ、科学（主に化学）を通じて教養を教えています。それ以外に同大学のスポーツ健康科学部、国際教養学部を併任しています。私は工学部の出身なので（もちろん学生達とは世代も違いますが）、学生達の興味や能力が異なるなど感じています。例えば、医学部は工学部の学生達と似ているところも多いですが、一定数18歳とは思えない高い倫理観を持った学生がいて将来医師になるということで頼もしく思います。スポーツ健康科学部は、勉強には苦手意識を持っているけれども、オリンピックなど世界をめざしているという学生が多くいます。国際教養学部は、3Cなんて言われる作文技術に慣れてしまった私には新鮮な“CorrectでもClearでもConciseでもないけれども感動するレポート”を書く学生もいたりします。材料や分析化学の人がいない環境に寂しさもありますが、割り切って違いを楽しみながら生活しています。

突然ですが皆さん「教養はありますか？」普段表面的には常識人のように振舞っているけれども心のどこかでは奇人でありたい、ユニークでありたい、そんな世界にいらっしゃる皆さん。この文章を読んで下さっている方にはそういった方が多いと勝手に想像して今本エッセイを書いています。「教養はありますか？」恐らくこの質問に大きな声で「はい」と答えること自体が教養の無さを表すあたりに、この教養という言葉の難しさがあるのかなと思います。皆さんのことはさておき、自信のなかった私は教養を教えることになり勉強しました。『教養』とは何なのか（What）。そもそもなぜ必要で（Why）、どうやったら身につくのか（How）。

教養には狭義には単純に“知識”という意味もあるようですが、GoogleもChatGPTも使い放題の現代において、大学そして学生から求められているのは恐らくもう少し深遠な広義の『教養』。こちらの教養になると前述の通り急に難しくなります。そこで、そもそもなぜ教養が必要なのか？ここから学びはじめることにしました。国際教養学部は除き、医学部やスポーツ健康科学部においてもなぜ教養が必要なのでしょう？すぐに理解できたのは医学部の医師が患者と心を通わせるために必要なものが教養ということです。もう少し深めると、自身や大切な人の健康が損なわれ過度なストレスによっ

て“論理”を司る脳の前頭前野の機能が著しく低下した、端的に言うと言葉（論理）の通じなくなった患者やご家族を前にして医師に残るものは数字（論理）ではなく教養というわけです。順天堂ではこういった概念を学是『仁』として定め、法人全体で共有しています。

では、スポーツ健康科学部においてはなぜ教養が必要なのでしょう？スポーツマンシップに通じる前述の『仁』はもちろんですが、私はもう一つ『知覚力』を向上させるためであると考えています。知覚力とは要は気付く力のことで、同じものを見ても人によって捉え方が異なります。これは知覚するものが異なるからで、知覚は知識の量や種類に影響を受けます。スポーツの練習においてよく競技を実施している動画をみますが、知識が無い状態で“見る”のと、例えば心理学、生理学、経営学を学んでから“観る”のとでは全く観えるもの（知覚できるもの）が変わってくるはずで、研究によると、これは誇張や言葉表現ではなく、Mental Imageryなどと呼ばれ、実際に目に映り脳で認識する像が異なってくるようです。つまり、教養を身につけると『知覚力』が向上し、文字通り世界が違って観えるわけです。

『教養』の全貌を明らかにすることは難しいですが、『知覚力』で様々なことに気付き『仁』の心で接する。こういった振る舞いができる人はまさに教養人という気がします。つまり教養（本稿では、仁+知覚力）を身に付けるためには、一見無関係・非効率にみえる狭義の教養（知識）の修得（How）が欠かせないということです。WhyからはじめかろうじてWhatにたどり着いた教養。教養はやはり誰にとっても大切そうですが、非効率的な学びを必要とする教養の効率的な教育方法Howは、私自身現在も模索中です。最後にこのエッセイのどこが分析化学なんだとお感じになった方もいらっしゃると思いますが、分析化学分野でユニークな知覚力を発揮するには分析化学と無関係・非効率にみえることも重要であるという本稿の論理にご賛同いただき、ご容赦下さい。

さて次の著者は私が研究をはじめたまさに1年目からお世話になっている、産業技術総合研究所の浅井志保さんをお願いしてあります。標準物質に関連する、まさに分析化学の主要分野で国際的に活躍されている浅井さんのエッセイを是非お楽しみください。

〔順天堂大学 石原 量〕